

高田城下町絵図 (近畿大学中央図書館蔵)

本絵図は、二〇二二年度に近畿大学中央図書館が購入したものである。二〇二二年度の基礎ゼミ(1年生を対象としたゼミナール)にて内容の検討を行った。受講者は下記の二二名である。

- 山村駿人・小西玲爾・小切朝賀・宮崎弘泰・小林陽翔・田和優希・川添純白・西村凌・近藤匠・竹村紀騎・東川怜生・中西七海・河本彩花・竹花優佳・津田真実・蔵本雄大・楠井祐大・西尾拓海・西野奏大・土井優汰・丸橋弘太郎

高田城(新潟県上越市)は、慶長一九年(一六一四)、徳川家康の六男松平忠輝によって築かれた。普請には、東北・北陸・信濃の一三の大名が幕府の命により動員されている。その後、城主は酒井・松平・稲葉・戸田・松平と移り変わるが、寛保元年(一七四一)に姫路より入封した榊原家が六代続き、明治維新を迎えた。

本絵図は、安政五年(一八五八)二月に千原村の若林弥左衛門が新調したことが左下の注記からわかる【図1】。千原村は、飯田川沿いの自然堤防上に営まれた集落で、高田城より六キロほど北東に位置する【図2】。弥左衛門は、嘉永二年(一八四九)の用水相論において千原村の庄屋としてみえる(『差上申熟証文之事』『上越市史 資料編5』50)。ここから、城下近郊の村方が作成した絵図であることが判明する。

楕円形の堀で囲われた城郭が中央に描かれているが、その内部の様子を知ることではできない。榊原家に残された「宝暦六年榊原家中屋敷絵図」(『上越市史

二〇二二年度基礎ゼミ受講生・新谷和之

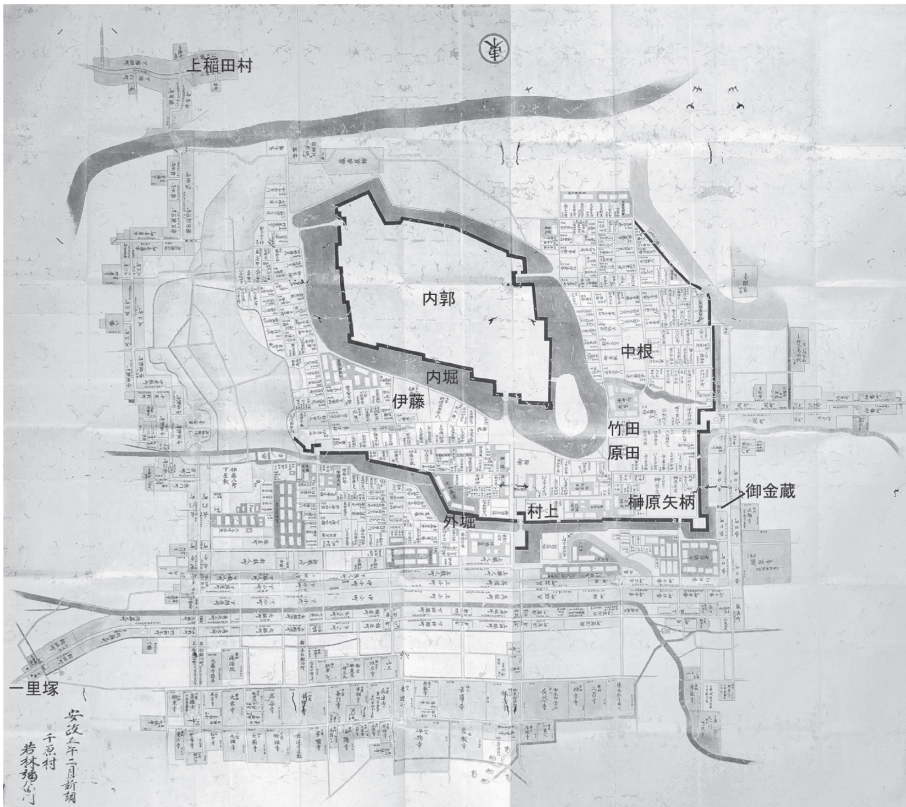


図1 高田城下町絵図 (縦一三二・五cm、横一四九・四cm)



図2 千原村周辺（高田城周辺絵図（近畿大学中央図書館蔵）部分）

別編6』口絵）によると、城内は本丸・二の丸・三の丸の概ね三重構成で、間に水堀が設けられていた。城郭の内部構造は機密事項であり、城下町絵図では本図のように白抜きで表現されるのが一般的であった。なお、城郭を画する黒い太線は、「宝曆五年榊原家中屋敷絵図」の凡例から土手であることがわかる。

内堀と外堀に挟まれた外郭部には、家臣の屋敷が立ち並んでいた。白地の屋敷地には、屋敷主とその禄高が記されている。注記の書き出しは、間口の方向をそれぞれ示しているものと思われる。屋敷地の面積には差があるが、これは家臣の禄高や地位を反映しているのだろう。たとえば、内堀の南西に面してひととき大きな屋敷地がみられるが、これは原田権左衛門の屋敷である。原田氏は、徳川家康の命により榊原家の家老をつとめることになった、いわゆる付家老である。原田権左衛門の屋敷地には「二千百三十五石六斗 外二公地千石」と記されている。公地とは、将軍家から直接与えられた土地であり、付家老としての地位を示している。

榊原家の付家老には他に中根・村上があり、この三家に伊藤・竹田を加えた五家が家老職をつとめる習わしであった（『上越市史 通史編』4、上越市、二〇〇四年）。中根の屋敷は内堀の南方にあり、「中根善右衛門 （外二公地） 百八十八石」とみえる。村上の屋敷は外郭の西端に構えられ、「村上弥右衛門 （外二公地） 二千三百石 外二公地千石」とある。ここは城下へ通じる門の南脇にあたり、城の防御上重要な場所であった。伊藤の屋敷は内堀の東に面しており、「伊藤八郎 一千六百六十一石六斗 伊藤八郎」と記されている。伊藤八郎は、

城下の北西、長門町の南側に広大な下屋敷をもっていた。竹田は原田の東隣に屋敷を構えており、「竹田十左衛門 一千七十六石八斗」とみえる。このように、家老たちはいずれも二千石を超える禄高をもち、外郭部に広大な屋敷地を構えていた。

ちなみに、外郭部で最も大きな屋敷が西南隅にあり、「榊原矢柄 三千四百石」と記されている。幕末期の「高田城下町絵図」（個人蔵、『上越市史 資料編4』付図2。以下、「個人蔵図」とする）では、この部分は「榊原丹波」となっている。榊原丹波は榊原家の一族で、徳川家茂の長州藩征伐において一軍を率いた長安の存在が知られる（『上越市史 通史編』4）。外郭の西南隅には櫓台とみられる突出部があり、軍事上の重要ポイントであったとみられる。村上上の事例と同様に、軍事上の要地に大身の武家屋敷を配置した事例と評価できよう。

外郭部には、武家屋敷とともに長屋が構えられているが、色分けが施されている。外郭西隅の「主水長屋」と南東隅の「新出丸長屋」が緑色で、その他は黄緑色である。これを「宝暦六年榊原家中屋敷絵図」と対照させると、緑色が「足軽長屋地」、黄緑色が「長屋地」にあたることが読み取れる。「個人蔵図」では、前者に黄色の長屋を描いて「クミ」と注記し、後者に緑色で着色し、「キリフ」の注記を施している。キリフ（切符）は藩の蔵から米を給録として与えられる家臣で、知行方の下位に格付けされる（『上越市史 通史編』4）。以上を総合すると、緑色が足軽長屋、黄緑色が切符の家臣が暮らす長屋となろう。緑色は外堀の西側にむしろ多く、切符と足軽との格差がうかがえる。

柿色で着色された町人地は、城の北側と西側の街道筋に集中している。北側の街道が松之山街道で、城の東側を画する関川を越えて十日町の方面に通じる（『新潟県の地名』平凡社、一九八六年）。関川の対岸にも町場が描かれているが、「稲田町」「下稲田町」に並んで「上稲田村」の注記がみえる。稲田村は、行政的には村方に属するが、関川に近接し、東方への窓口にあたるという地の利を活かして、実質的には町方として発展を遂げた（「解説」『上越市史 資料編4』）。

北の町人地と外郭部との間には空閑地がみられる。ここには田畑が広がっていたことが、「個人蔵図」で確認できる。外郭の南東にも同様の表現がみられるが、これも田畑をあらわしている。松平光長が城主の頃の城下を描いた「高田城下町絵図」（上越市立高田図書館蔵、『上越市史 資料編4』付図1）では、これらの区域には下級武士の屋敷が立ち並ぶ様子が描かれている。光長が延宝九年（一六八一）に改易された後、耕地としての開発が進められた（『上越市史 通史編』4）。

西側の街道が北国街道で、この一帯のメインルートである。北端には一里塚の注記と黒点が記され、木戸と番所のような描写がみられる。「個人蔵図」では一里塚の盛り土が表現されるなど、より絵画的に描写されている。木戸と番所の表現は、外郭南端の城門外と街道の南端にもみられる。なお、街道筋の春日町内には、外堀（櫓台状の突出部の対岸）に面して「御金蔵」があった。「個人蔵図」ではこの部分に建物が描かれているが、名称の注記はない。一方、前出の「高田城下町絵図」（上越市立高田図書館蔵）には御金蔵の記載がみえ、榊原氏入部以前からの施設であることが確認できる。

北国街道の西側に、ピンク色で着色された寺町がみえる。本史料では、各寺の軒先と奥行の長さが記載されている。町人地においても、軒先の間数がそれぞれ示されており、非常に情報量が豊かである。こうした数値の記載は、同じ榊原期の「個人蔵図」にはみられない。町人地や寺町の詳細な把握に本図の眼目があり、そのことは村方が作成主体であることと関わっているのだろう。